

2014 年度大学院入学式 学長式辞

埼玉大学構内の桜は、昨日からの雨にも負けず、今日もその美しさと独特の雰囲気醸し出してくれています。また、櫻をはじめとした木々も徐々に芽吹きはじめました。春の装いを色濃くする今日の良き日、ここに埼玉大学大学院入学式を迎えられた修士課程、博士前期課程の 499 名、博士後期課程の 34 名の皆さん、入学おめでとうございます。埼玉大学の役員、教員、職員を代表して、みなさんの入学を心から歓迎します。

特に、80 名の留学生のみなさんと、職に就きながら学位取得を目指す 40 名の社会人学生のみなさんには、さまざまな困難を抱えながら勉学を続けることに対し、敬意を表したく思います。

今日、ここに参列されたみなさんは、それぞれに、決意も新たに大学院での研究や生活を思い描いていることと思います。その気持ちをいつまでも大切にしてください。

さて、今年の博士前期課程の入学生は例年よりも多くなっています。これは、埼玉大学の進める機能強化構想の一環として、理工系人材育成の量的強化に関連し、理工学研究科博士前期課程の入学定員を今年度から 50 人、増やしたことによります。

文部科学省は 2013 年 11 月に「国立大学改革プラン」を公表しました。グローバル化、少子高齢化の進展、新興国の台頭などによる競争激化といった、日本が直面する社会経済状況の変化の中、国立大学は、社会の変革を担う人材の育成、イノベーションの創出やそれを支える人材の育成といった役割を果たすため、機能強化に取り組むことが求められています。

埼玉大学では、学部や大学院研究科のそれぞれに強み・特色・社会的役割を特定し、大学全体として行いうる機能強化のための戦略を、研究力の強化と人材育成の強化という形で自ら具現化しました。本学のこの機能強化構想は、大学改革の先導的モデルとして文部科学省から高く評価され、国立大学改革強化推進事業に選定されています。この第 1 段として、イノベーションを支える理工系人材の育成強化を目的に、先程述べました理工学研究科博士前期課程の入学定員を 50 人増員した訳です。

改革のキーワードは連携と融合。教養学部、経済学部、教育学部、理学部、工学部が 1 キャンパスに集約されているという埼玉大学ならではの特長を活かして、学部・研究科という組織の枠や人文・社会・自然科学という学問の枠を越えた真の連携とシナジーをもたらし、これまで埼玉大学においては必ずしも顕在化しなかった潜在的能力を組織的に発揮させて、埼玉大学総体として全国的な教育研究拠点としての光を放ちます。その上で、産学官連携をより一層強化し、地域のニーズに応じた人材育成や地域活性化機関としての役割をも積極的に担っていきます。

私は学長として、この機能強化構想を着実に進め、自他共に誇れる「知の府」としての埼玉大学を、埼玉から世界へと展開していきたく思います。そして、新たに入学された大学院生のみなさんも、埼玉大学の強力な構成員として、活気があり活力みなぎる大学へとダイナミックに変革する埼玉大学の一翼を担ってくれるものと期待しています。

埼玉大学では、グローバル化に対応した構想も具体化しつつあります。例えば、今年度から、経済科学研究科がタイのチュラロンコーン大学と、理工学研究科が台湾の国立交通大学と、それぞれダブル・ディグリー・プログラムを開始します。また、理工学研究科では、文部科学省の支援を受け、教員同士の日頃の研究連携をベースとして、埼玉大学と海外の協定大学の研究室間、つまり **Laboratory to Laboratory** で学生を行き来させる大学院生交流プログラム、**Lab-to-Lab Exchange Program** もスタートさせます。これは、学士・修士6年一貫教育の導入と連動して「座学と相補的な実践型教育プログラム」を作り、課題設定と解決までの戦略構築力と国際化対応力の養成を目指すものです。この **Lab-to-Lab** の考え方は海外の大学での評価も高く、人社会系の研究科でも導入していきたいと考えています。

以上のような特別な教育プログラムに限らず、大学院では、学内での留学生との交流や国際会議での研究発表など、「グローバル」に関わる機会が沢山あります。みなさん、是非、自ら積極的にその機会を捉えて下さい。

大学における学修、つまり自ら学んで修める学修は、徐々に研究に移行していき、大学院では研究を基本とした学修となります。

では、大学での研究とは一体何でしょうか？

昨年、岩波書店が、世界的変動に直面する大学を論ずるとしたシリーズ「大学」を発売しています。その第4巻として「研究する大学 - 何のための知識か」が出版されていますが、そこには次のように書かれています。

「20世紀の大学は研究機能を充実させ、社会における知識生産の最大の拠点として、ドイツからアメリカへとそのモデルを変えながら発展してきた。そして現在、経済活動と強く結びつく研究に膨大な資金が投入される一方で、伝統的な人文社会科学は、その社会的意義の模索を迫られている。研究をめぐる競争的環境や知的財産権のゆくえ、研究の自由と規制、現代の「文理の壁」問題など、大学の生み出す〈知〉の歴史的変貌について考察し、大学という存在の「再定義」を試みる。」

具体的な議論は多岐に亘り、大学を運営する立場の私にとってとても興味深いのですが、その中で、大学院生として研究に携わるみなさんにとっても重要と思われる議論を一部、紹介することにします。それは、「何のための研究か」を考える能力についてです。

研究には、「知識のための科学」という観点に留まらず、「社会のための科学」の観点が重要とされます。大学での研究は自由度が高く、多様性を許容すべきであって、これら二つの観点からの研究の共存や両立が可能と言えます。また、多様な研究の担い手たる人材の育成も大学の重要な仕事であり、大学は「何のための研究か」を考える能力を持った研究人材を育成する必要があるとのこと。さらに、

「「教養」の理念のもとで、新たな学際的研究と教育が創出されなければならない。文系学生には科学リテラシーを、理工系学生には社会文化リテラシーを授けるべきである。」 また、「一定の研究活動を経験することを通じて、はじめて、自らの研究の意味について考え直し、あるいは社会との接点について問題意識を持ち、ビジネスや経済、政治に関心を持つということもあるだろう。また自らの研究の倫理的な課題について、極めて現実的な問題意識を持つこともあるだろう。ここでいう「教養」とは、

まさに「何のための研究か」を考える能力なのである。」

みなさん、どうでしょうか？ これからの大学院での研究において、折に触れ、「何のための研究か」を考えてみませんか？

研究について話す上で、現在、世の中を騒がしている STAP 論文に関することに言及せざるを得ません。理化学研究所は4月1日、Nature に掲載された STAP 細胞に関する論文の筆頭著者に研究不正行為があったとする最終調査報告を公表しました。その是非についてここでお話ししたり、行為を安易に批判したりすることは控えるべきことと思いますが、みなさんにお伝えしたい内容を含んでいることから、話題とすることにします。それは、研究者の責任と真摯さであろうと思います。研究者は、未熟であったとしても、たとえ、それが悪意でないにせよ、間違いには責任が問われ得ること、研究者倫理とともに「科学に対する誠実さ・謙虚さ」を併せ持つことが要求されることを、この機会にしっかりと理解しておく必要があります。このことは、「何のための研究か」を考える能力とも関連しているように思います。しかし、これらのことが、先程述べた、大学での研究の自由度を奪うものでは決してなく、研究への熱意やアグレッシブさを拘束するものではありません。みなさんには、発想を自由に、がむしゃらに研究にチャレンジして欲しいと願っています。

For overseas students who don't understand Japanese, I would like to express a cordial welcome to all of you on behalf of all the faculty and staff of Saitama University with blooming cherry blossoms in this campus. Our Graduate Schools of Saitama University proudly offer education and research opportunities of high quality to your academic interests.

Aside the study activities, you will have your own day life in this country. For some of overseas students here, this may be the first time to stay in Japan. And I am afraid if you might come across unexpected difficulties mostly because of the differences between the culture of your own country and that of this country. If it would be the case, please remember that all the faculty and staff of Saitama University are willing to help you to get rid of the troubles you would be involved.

Finally, I sincerely hope that your student life at Saitama University will be a meaningful and productive one.

最後に、みなさん一人一人が、研究を基本とした大学院での学修において成果をあげ、それが、社会の変革を担う人材、イノベーション人材、グローバル人材としての活躍に繋がっていくことを祈念して、私の式辞とします。

平成 26 年 4 月 4 日

埼玉大学長 山口宏樹